新出

波斯教殘經に就て

有唐一代の盛世に當り漢民族が其の勢力を四方に發展するや、遐邇悉く來り貢し、一時長安の首都は亞細亞の中府なるが如き觀を呈するに至れり。されば四方の文化亦翕然として支那に集り互に其光彩を競ひしが如しと雖、其後兵亂頻りに起りて、古記空しく湮滅に歸し、千載の後其の當時を偲ぶものをして、徒らに茫漠の嘆に堪えざらしむ。去歳敦煌莫高の石室より英、佛の學者が齎らし去りたる多くの記錄は、思ふに稍此間の消息を解くに足るものあるべし、早く之が精細なる研究の發表を見て、暗府に炬火の光明を得んとするもの吾人の切望して止まざる所なりとす。一度英に輸せられ、二度佛に送られ、然も尙剩す所の數千卷は敦煌石室の遺書として今や北京學部の有に歸し、其の目錄の如きは既に京都文科大學教授諸氏によりて發表せられたり。頃日碩學羅振玉氏此中より殘經一卷を撰出して、名けて波斯教殘經となし、之を國學叢刊第二册に收めて世に公けにせらる。余幸に其の一本を贈らる。披きて其の序を閲するに曰く、

殘寫經一卷、前半已缺佚、後半完好、然無後題、吾友臨川李君證剛翊灼、以其中專闡明明暗之旨、證以景教三威蒙度讃有合處、遂定爲景經典、然考、火祆摩尼與景教頗類似、未易分別、且皆由波斯流入中土、故姑顏之曰波斯教經、以俟當世之宗教學者考證焉、